古代北方辺境における人的交流

樋　口　知　志

は　じ　め　に

東北地方北部，北海道地方の考古学的知見の著しい増大を契機として，近年日本列島北方辺境の古代史研究は急展開をみせている。『新版古代の日本⑨　東北・北海道』（角川書店，1992年），『古代王権と交流１　古代蝦夷の世界と交流』（名著出版，1996年）は，ともに文献史学・考古学による現段階でのこうした研究の到達点を示すものであるが，本格的研究は未だ緒についたばかりの感がある。

筆者自身，先に「渡島のエミシ」[1]と題する小論で７世紀以降の北海道エミシの動向についての卑見を提示したが，ここではそれを下敷きとしつつ，古代北方世界における人的交流の諸相について概観することにしたい。

1　伊奈理武志と志良守叡草　――渡島蝦夷・粛慎の首長たち――

甲寅に，越の度島の蝦夷伊奈理武志と，粛慎の志良守叡草とに，錦袍袴・緋紺絁・斧等を賜ふ。（『日本書紀』持統10年（696）３月３日条）

渡島蝦夷の伊奈理武志と粛慎（和訓「アシハセ」）の志良守叡草がともに朝貢に訪れ，二人とも同じ賜物に与ったということが知られる記事である。

「越の度島」とあるのは，この時期には渡島地方のエミシが越国の管轄下にあったためである。なお粛慎といわれる集団も同様に越国の管轄下にあったかは，文章上ははっきりしない。

まず渡島蝦夷についてであるが，現在では多くの論者が北海道島に住むエミシ集団であったことを認めている。道内，とくに道央・道南地方においては7・8世紀代の本州系遺物や中央政府との繋がりを示唆する遺物が相当多く見つかっており[2]，渡島を北海道に比定することに何らの無理もない（なお現在支庁名などで用いられている「渡島」は明治初期に命名されたもので，古代の渡島とは関係ない）。かつては，この時期において中央勢力が北海道にまで影響力を及ぼしたとの見方をあまりにも誇大だとし，渡島を本州内に求める説が主流をなした時期もあったが，近年の考古学的研究の進展は最早そうした説の存立の根拠を一切否定し去ったかにみえる。斉明朝における著名な阿倍比羅夫の北方遠征（658～660）の到達地もまた北海道であったことも，今や大方の認めるところとなっている[3]。この記事にみえる伊奈理武志が北海道のエミシ集団の首長層に属する人物であったことは，ほぼ疑いないといえよう。

考古学的には，この時期の渡島蝦夷はいわゆる擦文時代初期，擦文文化胎動期の道内（とくに道央・道南）の諸集団に比定される。擦文時代とは北海道で続縄文時代に後続する時代であり，最近の研究では7世紀頃にその始期が置かれるようになってきている[4]。擦文文化の特色は，擦文土器に本州系の土師器の影響が強く及んでいることからも明らかなように本州系文化の色合いが濃厚な点にあり，本州方面からもたらされた鉄器を用い，麦・粟などを作物とする農耕を行い，本州の稲作農耕民のものと殆ど同様な構造の竪穴住居（竈が伴う）に居住した。余市町大川遺跡では，7世紀以降各時期の竪穴住居の遺構から大量の炭化米が検出されており，本州産米（東北地方産か）の流入ルートが存在し，擦文文化の人々は米の味をも知っていたらしい。また石狩平野には，7世紀後期～8世紀代とみられる終末期古墳群の存在が確認されており（江別市後藤遺跡，同町村農場遺跡，恵庭市柏木東遺跡），ちょうど阿倍比羅夫の北方遠征の時期以降に，本州側から津軽海峡を越えて，

古墳文化の伝播がみられる。なお沈線による多様な文様表現がみられる典型的・本格的な擦文土器が成立するのは9世紀のことであるらしく，この時期のいわゆる初期擦文土器とは，続縄文土器最終末の北大式土器に土師器的変形が一定程度加えられたものと，東北地方北部と同様の土師器そのものとからなる[5]。

一方，志良守叡草の属した粛慎とは如何なる集団であろうか。近年有力なのは，この粛慎がいわゆるオホーツク文化のオホーツク人集団ではないか，とする説である。とくに考古学研究者によって強く主張されている[6]。

オホーツク文化とは，6・7世紀頃～9・10世紀頃まで道北・道東のオホーツク海沿岸地方で展開した北方色の濃い文化で，海洋漁撈，海獣狩猟，犬・豚の飼育などを特色とする。遺跡からの出土遺物には，沿海州方面のいわゆる靺鞨・女真文化のものとまったく共通するものが数多くみられる。明らかに外来系の文化であり，またオホーツク文化の遺跡から出土した人骨の計測値によれば，オホーツク人はサハリン・アムール川河口地域の人々の血統にいくらか北海道の住民の血が混入したものとみられている[7]。オホーツク文化は，成立後何段階かを経て10世紀頃には擦文文化に吸収されるかたちで終焉を迎えるが，7世紀終末のこの時期はかなり活発な活動期に当たっており，枝幸町目梨泊遺跡や網走市モヨロ貝塚など大規模で豊富な出土品を伴う遺跡がある。

先の記事にみえる粛慎をはじめとする『日本書紀』中の粛慎をオホーツク人とみる説の根拠は，次のようなものである。①中国史上では2，3世紀以降沿海州，アムール川中下流域の諸部族に対する呼称として粛慎の語が使用されているが，実際オホーツク文化にはそれらの地域からの影響が非常に色濃く，文化の荷負者がそちらの方面から渡来した可能性が高いこと，②中国古典籍には粛慎が石鏃の弓矢を使用することがみえ，オホーツク人もまた考古学的知見から石鏃の弓矢を使用していたことが確認されていること，③『日本書紀』斉明6年（660）3月条の阿倍比羅夫による第3回目の北方遠征に関する記事によれば，渡島の地で渡島蝦夷と粛慎とが敵対関係にあったことが知られるが，渡島蝦夷が北海道土着の住民だとすれば粛慎はそれとは異種

の集団である可能性が生じてくること。

以上の諸点はいずれもある程度の説得性がある。しかし仔細に考えれば，いずれもあくまで状況証拠の域にとどまり，確証とはならない。むしろ，目梨泊遺跡やモヨロ貝塚からの出土品中に本州系の遺物がきわめて少ないことは[8]，本節冒頭に掲げた史料の内容と明らかに抵触するのではなかろうか。渡島蝦夷の伊奈理武志と粛慎の志良守叡草はこの時ともに同じ賜物に与っている。しかしながら，北海道の擦文遺跡からは鉄器をはじめ文字の記された土師器・須恵器（すえき）や和同開珎（わどうかいちん）銭，銙帯（かたい）金具，炭化米などの豊富な本州系遺物や終末期古墳などが確認されるが，一方7・8世紀のオホーツク文化の遺跡から出土する本州系遺物は，皆無ではないがきわめて少ないのである（擦文集団を介して間接的に入手したものとみる方が妥当なのではないかと思われる[9]）。粛慎の首長への賜物は，中央政府と粛慎集団との政治的・経済的交流の発展に何らかの寄与をもたらしそうなものであるが，オホーツク文化の遺跡の現況からはそうした事情を読み取ることができないのである。

筆者は先に，こうした点に加え，粛慎志良守叡草と血縁関係があったらしい「狄志良須俘囚宇奈古」なる人物が8世紀後期頃に秋田城下に居住していたこと（なおこの点については第3節であらためて述べる）を考え併せて，粛慎とはオホーツク人集団ではなく，渡島蝦夷と同じく道内の初期擦文集団とみるべきことを論じた[10]。奈良時代の末期，秋田城下に志良守叡草と関係深かった人物が居住していたということは，持統紀で「粛慎」と呼ばれていた集団はその頃にあっても律令国家との間の政治的・経済的交流を強くもっていた可能性が高いということになる。8世紀後期頃に，オホーツク人集団が律令国家との間にそのような交流のパイプを確保していたとは，遺跡・遺物の情況をみる限り，如何にも考えがたい。なお渡島蝦夷，粛慎ともに道内の初期擦文集団であるとするならば両者の間での区別が問題となるが，私見では，渡島蝦夷とは斉明朝の阿倍比羅夫の北方遠征の頃，津軽蝦夷を介して中央政府側との接触を求めいち早く帰服した北海道エミシ，粛慎とは比羅夫の第3次遠征の後に遅れて帰服した北海道エミシであったと考えている[11]。

“古参”の北海道エミシの首長たちを代表して伊奈理武志が，“新参”の

北海道エミシの首長たちを代表して志良守叡草が，二人連れ立って上京朝貢し，二人とも別け隔てなく同じ賜物に与ったのであった。おそらくその際には，二人による朝貢の儀式が宮中で行われたことであろう。その舞台であったまだ真新しい藤原宮の威容は，二人の目にはどう映ったであろうか。

おそらくはこの出来事がきっかけだったのであろうが，8世紀以降の『続日本紀』以下の正史には，粛慎及び渡島蝦夷という名称は一切みえなくなる。以後は，北海道住民に対する名称としてはもっぱら渡島蝦狄または渡島狄が使用されるようになる。これは“古参”“新参”の区別がなくなり，いわば道内の親中央政府勢力の統合が進められたことを意味するのであろう。伊奈理武志と志良守叡草は，それぞれの旧勢力を代表するものとしての地位を保証されたとともに，この出来事をきっかけとして，中央政府の意をうけ，道南・道央を中心とする各地のエミシ集団の首長たちを律令国家に対する朝貢関係のうちに組織するうえで，なお一層顕著な役割を果たすことになったであろうと推察する。

2　諸君鞍男　――「靺鞨国」に渡った使者――

丙子に，渡島津軽の津司従七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨国に遣して，その風俗を観しむ。(『続日本紀』養老4年（720）正月23日条)

渡島津軽津司という官にあった諸君鞍男なる人物をはじめとする6人が，靺鞨国へ遣わされ，その国の風俗を視察したことを記した記事である。この記事の意味するところについてはこれまで色々な議論があり，諸説紛々としている。

まず諸君鞍男がどこの出身で如何なる階層からでた人物であったのか，という点がよくわからない。諸君という姓をもつ人物は他史料には一切みえない。鞍男という個人名はいわゆる“和人的”な名であり，辺境のエミシ社会出身の人物とは考えにくいのであるが，中央出身か地方出身かの判断もつかない。従七位上という位階はいわゆる内位であるので，中央の中下級官人層出身の人物であるとみるのが穏当なようにも思われるが，確言できない。

渡島津軽津司という官の性格についてもこれまで議論があったが，筆者は瀧川政次郎氏の説くように，渡島（北海道）側・津軽側双方の津（港湾施設）の管理に当たる官と解するのが妥当であると思う[12]。またその現地機関の置かれた場所は，阿倍比羅夫の北方遠征の際の経過を参考とすれば，津軽有間浜が有力であろう。有間浜の比定地としては，これも瀧川氏のいうように，十三湖沿岸の十三湊の地が最も可能性が高いとみられる。なお津軽地方のエミシは，斉明元年（655）7月に難波朝廷において位階を授けられており（『日本書紀』），阿倍比羅夫の遠征以前に既に中央政府に対する朝貢関係に入っていた。この点及び比羅夫の遠征の経過をめぐる検討から，筆者は先に比羅夫の遠征が津軽地方のエミシの先導・協力により北海道へ到達することを目的として，計画・実施されたものであったと推察した[13]。そして渡島蝦夷とは，この津軽蝦夷と親密な交流関係にあり，中央政府との政治的・経済的交流に積極的な姿勢を示していた北海道内のエミシ集団であったとみるのである。いわば津軽のエミシ集団は，当初から対北方交流の窓口としての役割を占めていたといってよい。

諸君鞍男が現地に常駐していたかどうかはわからない。あるいは津司の施設そのものは，在地のエミシ系の人々によって常時は運営されていたのかもしれない。しかし，津軽海峡を挟んでの南北の交流ルートを管理するための律令国家側の施設が，この時期に実在していたことの意義は大きい。青森県市浦村の福島城跡では最近発掘調査が進められ，10・11世紀頃のものとみられる城柵類似の構造を有する巨大な遺構が確認されたが[14]，渡島津軽津司はその先駆をなすものである可能性がある。あるいは阿倍比羅夫の遠征の後，7世紀後半代にはその実体は成っていたのかもしれない。

当記事に関して最も重大な問題は，「靺鞨国」というのがどこであるかということである。この点についてはこれまでのところ，①渤海国を指すとする説，②広義の靺鞨族の居住地域を指すとする説，③北海道内のオホーツク文化が展開していた地域を指すとする説，といった三様の説が出されている。筆者は以上のうち②説が最も妥当性が高いとみているが，近年盛んに支持されているのは③説である。

③説はそもそも粛慎オホーツク人説を前提とした見解である。『日本書紀』にみえる粛慎を北海道のオホーツク人とみたうえで，「粛慎」も「靺鞨」もともに和訓は「アシハセ」であるから，靺鞨も粛慎と同じくオホーツク人である，とするものである。しかしながら，前節で述べたように筆者は粛慎オホーツク人説を採らない。また確かに粛慎も靺鞨も「アシハセ」と訓まれているが，「アシハセ」とはかつて室賀信夫氏が正しく指摘していたように，「国土の北辺と大陸との地理的媒介者」としての象徴的性格を帯びた語であり，その民族的実体を必ずしも単一と見做す要はないのである[15]。なお，当時の律令国家支配層の国土北辺に対する認識を低く評価し，「現実に使節を派遣しうるのは，わずかな文献と伝聞以外には知見のない大陸の靺鞨ではありえまい」とする意見もあるが[16]，こうした一見“常識的”な見方についても，この際再検討が必要であるように思われる。

ここで注目しておきたいのは，著名な多賀城碑の碑文である。天平宝字6年（762）12月1日の日付をもつこの碑文は，多賀城が神亀元年（724）に創建されたこと，天平宝字6年に按察使・鎮守府将軍であった藤原恵美朝臣朝狩が修造を行ったことを記すが，それとともに碑文冒頭には「去京一千五百里／去蝦夷国界一百廿里／去常陸国界四百十二里／去下野国界二百七十四里／去靺鞨国界三千里」といった諸地点から多賀城までの里程についての記載がみられる。これによれば，「靺鞨国界」からの里程3000里は平城京からの里程1500里の実に2倍となっている（仮に実測値であるとすれば，1963キロメートルとなる）。こうした記載が誇大に過ぎるとの見方から碑文偽作説に左袒する見解もかつてみられたが，現在では多賀城碑偽作説はもはや積極的根拠を失っており，また神亀元年創建や天平宝字6年改修という碑文の内容が発掘調査によって判明した考古学的知見とよく符合するという点も，真作説を裏付ける結果となった。してみれば，3000里という里数の正確さはともかく，蝦夷の地との境よりも遥かに遠い北方の地に関する何らかの地理的認識が存したことの意味について，改めて問い直す必要があるであろう。

前節でも触れたが，近年発掘調査が進められた北海道余市町の大川遺跡からは，大量の古代遺物が出土し，注目を浴びている。同遺跡は余市川河口右

岸の広大な砂丘上に立地する。出土品中には文字の記された土器や炭化米，鉄刀・鉄製鎌などの鉄器といった明らかに本州系の遺物が数多くみられるが，実はそれ以外に大陸系の遺物も認められるのである。7世紀前後の土師器とともに墓壙から出土した青銅製小鐸（鈴）は耳飾りであったとみられるが，類品は中国の黒竜江・河北・遼寧・吉林省やロシアのアムール川中流域などで確認されている。また10世紀頃の住居跡から出土した黒色土器，墓壙出土の環状錫製品なども同様に大陸北方からの移入品であるとみられている[17]。道北・道東のオホーツク文化の遺跡から数多くの大陸北方系の遺物が出土している点からみれば，大川遺跡出土のこれらの品々はオホーツク人集団を介して入手したものとも考えられるが，交易港に相応しい同遺跡の立地からすると，この地が古代にあっても北海道における対北方交流の玄関口としての役割を果たしていた可能性は否定できない。

なお『類聚国史』殊俗部渤海上，延暦14年（795）11月丙申（3日）条によれば，渤海国使の呂定琳ら68人が「夷地志理波村」に漂着し劫略されたことがみえる。「志理波」はアイヌ語のシリ・パであり，山が頭を海際にもたげた所，すなわち岬を意味する。ちょうど大川遺跡のすぐ西にはシリパ（尻場）岬があり，現在でも漁師たちに格好のランドマークとして利用され，その勇壮な外観から地元のシンボルとなっている。既に指摘があるように，志理波村とは大川遺跡の港湾集落そのものか，またはその下に組織されていた近在の集落であったのではなかろうか[18]。

諸君鞍男の一行6人は，渡島津軽津司の所在地であった津軽十三湖沿岸の十三湊の地を船出し，日本海沖合から津軽海峡を渡り，渡島半島西岸づたいに航行，大川の港湾集落に到った可能性がある。大川の集落は道北・道東のオホーツク人集団との頻繁な接触があり，またそれらを介して大陸北方とも結びつきをもっていた。鞍男の一行もそうしたルートに乗り，引き続き日本海岸を北上，そして稚内周辺や利尻・礼文島のオホーツク人集団の先導のもとに宗谷海峡を渡り，サハリンを北上，間宮海峡を越えてはるばる黒水靺鞨の地に到った，との経過を想定することができそうである。

以上の想定が仮にほぼ正しいとすれば，如何にも壮大なスケールの旅路で

ある。しかし現在の考古学的知見からすれば，決して荒唐無稽の想像ではない。記事の1月23日という日付がどの時点のものであったのかは不明であるが，日本海航行の時期ということを考えれば，出発は海の凪いだ夏場頃で数か月を経て靺鞨の地に到り，そこで冬を迎え長期に亙って接遇をうけ，越冬してのち春以降に帰途についたのであろうか。エミシの地を遠く北に越えた異境の凍てついた大地を踏みしめた時，鞍男は何を想ったであろう。

北のエミシの地の奥には，果てしなく広がる広大な世界があった。当時の“和人”にとってほとんど未知であったそうした世界は，エミシとは深い繋がりがあったのである。いずれにせよ，鞍男らの遠征は，中央政府のエミシ観を一変させる程のインパクトをともなう一大事件であったに相違ない。

多賀城碑の「靺鞨国の界を去ること三千里」なる文言は，奈良時代後期の律令政府のエミシ観の一端を反映しているのであろう。古代のエミシ問題とは，城柵による直接統治が及ぶ範囲や陸奥・出羽両国内の範囲に限定される問題ではなく，正にサハリン・沿海州にまで及ぶ北方世界の人的交流の歴史の集積をもそのうちに含むものであった。

3　狄志良須俘囚宇奈古　――秋田城下の北海道エミシ――

> 乙卯に，出羽国鎮狄将軍安倍朝臣家麻呂ら言す。狄志良須俘囚宇奈古ら款して曰く，己れら官威に拠り憑みて，久しく城下に居す。今この秋田城は遂に永く棄てられんか，番を為し旧に依りて還び保らんか，てへり。
> （後略，『続日本紀』宝亀11年（780）8月乙卯（23日）条）

時は伊治公呰麻呂の乱が陸奥国側で同年3月に勃発し，その戦禍が周辺各地に拡がりをみせていた頃のことである。乱の余波は奥羽山系を越えて出羽国側にも及んだようで，周囲をエミシ村に囲まれて立地していた秋田城下にも一気に緊張の空気がたちこめた。そうした折，城下住人の「狄志良須俘囚宇奈古」なる人物が鎮狄将軍安倍家麻呂に対して，秋田城を棄てるべきか，それとも旧来のように番をなして守るべきかと言上したことが知られる。

この「狄志良須俘囚宇奈古」とは1人の人名なのか，それとも「狄志良須」

と「俘囚宇奈古」という2人の人名なのかが問題であろう。まず「狄」という語は「蝦狄」というに等しく，陸奥国側で「蝦夷」と表記するのに対して出羽国側では「蝦狄」と表記される。「蝦夷」「蝦狄」ともに，在地の首長層を中心とした地域集団ごとに本拠地在住のままで帰降したエミシを意味する。一方「俘囚」というのは，地縁関係を失い個人・親族単位で個々に帰降したエミシで，その多くは城柵下の地域に移り住んでいた[19]。「狄」と「俘囚」がおよそ以上のような意味であるとすると，一見「狄志良須俘囚宇奈古」を1人分の人名とみるのは無理であるかのようである。しかしながら，この場合はこれを1人分の人名と見做すべきである。

俘囚には律令国家により，姓が与えられていた。主に吉弥侯部（きみこべ）という姓である。～部というかたちのいわゆる部姓（べせい）は公民のうち一般庶民的階層のものに対して与えられたものであり，このことは俘囚が一定程度体制内化されたエミシであったことを物語っている。なお，一方の蝦夷・蝦狄の方は史料上無姓のものもみえ，国家への従属が確認された段階でも本拠地名＋君（きみ）（公）というかたちのいわゆる君（公）姓を付与された。君（公）姓は夷姓として扱われていた。前出の伊治公呰麻呂というのも蝦夷身分に該当する。

さて問題の人名についてであるが，秋田城下に既に長く居住していたとあるから，その身分は基本的には俘囚である筈である。しかし何故か部姓を伴っていない。とくに「俘囚宇奈古」だけを1人分の人名とみた場合には，これは唯一異例の無姓俘囚となってしまう。やはりそうみるべきではなかろう。この人物は特殊な事情により，秋田城下の俘囚でありながら通常の部姓を付されず，「狄志良須俘囚宇奈古」なる特別な名で称されていたとみる他ないのである。

ここで注意されるのは，「志良須」という称である。既に指摘があるように，「志良須」は「シラス」であり，これは第1節で登場した志良守叡草の「志良守」と共通する[20]。また「志良守（須）」を姓としてもつ人物は，古代史上他に例はない。この点からみれば，狄志良須俘囚宇奈古とは持統朝に上京朝貢した粛慎志良守叡草とかなり近い関係にあった人物である可能性が高い。つまり彼が通常の部姓を付されずこうした特殊な名で称されているの

は，父祖がかつて粛慎と称されていた北海道エミシであったという特殊な素性に由来していたのではなかろうか。また本来俘囚には馴染まない狄という呼称が取られていないのも，依然として故郷の母集団との関係が深く，しばしば北海道との往来があったためであると解釈できる。

なお狄志良須俘囚宇奈古らによる言上がなされる2，3ヵ月ほど前，呰麻呂の軍勢が多賀城を焼き討ちし，乱が最高潮を迎えていた頃，北海道エミシの船団は秋田城へ朝貢にやってきたらしい。

> 出羽国に勅して曰く，渡島の蝦狄早く丹心を効し，来朝貢献して，日たること稍く久し。方今帰俘逆を作して，辺民を侵し擾る。宜しく将軍・国司賜饗の日，意を存して慰喩すべし，と。(『続日本紀』宝亀11年5月甲戌（11日）条)

北海道のエミシ集団が朝貢に訪れた際に，彼らが反乱の不穏な空気に動揺することのないよう賜饗の際に配慮することを，鎮狄将軍と出羽国司に対して求めているものとみられる。北海道エミシの側が，この突然の本州側でのエミシ反乱の勃発を既に情報として得ていたか否かは定かではない。しかしこの時北海道エミシが反乱軍側に同調した形跡は一切なく，むしろ本州産品を入手するための機会として秋田城での朝貢がきわめて重要性を帯びていた点からすれば，彼らの政治的立場は本州側の反乱エミシに対して著しく対立的であった可能性さえあろう。筆者は，狄志良須俘囚宇奈古が朝貢のために来航した北海道エミシと城下で接触し，その意をうけて城の停廃に関する言上を行ったのではないかと推察している。北海道エミシにとってみれば，秋田城下との通交は交易による本州産品の入手経路としては最も重要なルートであった。あるいは狄志良須俘囚宇奈古自身も，秋田城下・北海道間の交易の従事者として活発な活動を展開した結果，北海道から秋田城下に移住した人物であったのかもしれない。

なお注目すべきは，『続日本紀』宝亀2年（771）6月壬午（27日）条に「賊地野代湊」とみえ，阿倍比羅夫の北方遠征の時点では渡島蝦夷と同盟的関係にあった津軽の勢力に南接する能代（野代・渟代）地方が「賊地」とされていることである。津軽に関してはやや後のものになるが，『日本後紀』弘仁

5年（814）11月己丑（17日）条で胆沢（いさわ）・徳丹（とくたん）2城の城下と津軽の狄俘について「野心測り難し」とされており，北上盆地平定よりも前の時期には津軽エミシが律令国家に対する敵対勢力の一角となっていたことが窺われる。おそらく津軽・能代ともに宝亀年間頃には国家に対する敵対的立場へ傾斜していったのではなかろうか。また第2節でみた渡島津軽津司も，おそらくこの頃には既に退転していたことであろう。7世紀後半～8世紀前半には津軽・能代・秋田地方のエミシと北海道エミシとは同盟的関係にあったものが[21]，この時期には一変して対立的様相を深めていくことには，大いに注意される。秋田城の停廃に関する言上を行ったのが，秋田城にほど近い周辺地域を本拠とするエミシではなく，秋田城下の北海道エミシであったということも，あるいはこうした事情と関わるのかもしれない。

結局この時は秋田城は停廃されなかったが，この後も秋田城の停廃問題は何度も繰り返し浮上することになる[22]。北海道エミシの秋田城下での交易活動はますます活発になっていったらしいが，本州北部のエミシ集団との乖離もまた一層進んでいくものとみられる。100年近くのちの貞観（じょうがん）17年（875）には，水軍80艘の北海道エミシが秋田・飽海（あくみ）両郡に来襲，その地の百姓21人を殺害したことがみえる（『日本三代実録』）。またその3年後の元慶（がんぎょう）2年（878）には秋田地方周辺で元慶の乱と呼ばれるきわめて大規模なエミシ反乱が勃発（同），秋田城は陥落し，雄物（おもの）川以北の地は能代・比内（ひない）・鹿角（かづの）あたりまで反乱軍側に組織され，津軽の勢力もまた大多数が反乱軍側に同調的であったが[23]，そうしたなか，北海道エミシ勢力のみが津軽の勢力の一部と提携し，政府側に与して反乱軍を襲撃することを願い出るという事態が生じている。さらに寛平（かんびょう）5年（893）にも，渡島狄と奥地俘因（東北地方最北部のエミシ）との間に，大規模な戦闘をも惹き起こしかねないような，ただならぬ軍事的緊張が発生している（『日本紀略』）。古くは同盟的な関係にあり一体的であった東北地方北部のエミシと北海道エミシとの間柄は，この段階に到っては明確な敵対関係に転化してしまっている。

4　津軽海峡を越えて　――むすびにかえて――

以上3節にわたって，主に7世紀後期から奈良時代末までの北方世界における人的交流に関する数齣の事例を取り上げ，若干の考察をめぐらした。史料的限界から決して豊富な知見は得られておらず，いく枚かのぼやけた静止画像しか手掛りがないかのようであるが，考古学的知見にも援けられつつ北方世界の史的環境に即して理解しようと試みた。

第1節では，阿倍比羅夫の遠征を契機として中央政府との結びつきを深めていった北海道エミシ勢力の統合が7世紀末に進められ，それにより北海道エミシと中央政府との政治的・経済的交流が一層緊密になっていったことを示した。また第2節では，8世紀前期に津軽と渡島（北海道）との間に律令国家下の公的な通交ルートが存在したこと，それを管掌する官にあった人物が北海道エミシやオホーツク人集団とも接触しつつ，遠く大陸北方にまで実際に遠征したらしいことを推察した。こうした7世紀後期～8世紀前期の段階では，東北地方北部と北海道とはきわめて緊密に結びついている。津軽海峡を挟んだ南北の地域の一体性が強く現れている。

第3節では，伊治公呰麻呂の乱の時期の秋田城下の情勢をみた。城下に居住していた北海道エミシ出身の人物の挙動からは，北海道エミシと秋田城・城下との特別な結びつきが明らかに読み取れるとともに，一方で東北地方北部エミシとの関係の希薄化，乖離が窺われる。8世紀のある時期以降，北方辺境における人的交流の様相に変化が現れてきているのである。

ところでこの8世紀における変化という点に関して注意されるのは，近年の考古学研究の動向である。第1節でも少し触れたが，東北地方の土師器と一線を画する典型的な擦文土器が北海道に成立し，北海道の独自色の強い本格的な擦文文化が全道的に展開するのは，9世紀以降のことであるとみられている。また三浦圭介氏によれば，9世紀の初頭には東北地方北部の土器も変化し，東北地方南部の土器との間で強い斉一性がみられるようになるという[24]。土器様式からみるかぎりは，9世紀には津軽海峡を境に南北が分断されたような様相を呈するのである。こうした変化について三浦氏は，8世紀

から9世紀にかけての律令国家による北奥支配の圧力に起因するのではないかとしているが，従うべきと考える。

とはいえ，8・9世紀においても北海道のエミシ集団は秋田城・城下を窓口として本州系文化と結びついていた。であるから，9世紀に北海道の文化が東北地方北部の文化とは異質なものになっていき，北海道色の強い文化形成に向かっていくというのは一見奇異なようでもあるが，この点については以下のように説明できよう。7世紀から8世紀の早い段階においては，東北地方北部のエミシ勢力を通じて本州系文化が北海道内に流入し，定着していった。人間集団じたいの移住を伴う場合もおそらく決して少なくなかったとみられ，石狩平野の終末期古墳の被葬者や大川遺跡の土壙墓の被葬者のなかに本州からの移住者がいた可能性も十分あろう。しかし8世紀のある段階以降は，城柵を拠点としたエミシ支配を推進する律令国家が北海道エミシとの政治的・経済的交流を独占し，北海道エミシに対する東北地方北部エミシの影響力を排除するようになったとみられる。これは北海道エミシとの交易による権益を独占しようとする国家側の経済政策によるものとも解せるが，他面では一種の分断策であり，エミシ集団の広域的な結束を未然に防ぎ，各地域集団に対する個別支配をめざす意図から出たものでもあったろう。こうした律令国家による分断策の影響をうけ，北海道エミシと東北地方北部エミシとの直接的な交流は急速に衰退し，北海道エミシにとっては定期的な秋田城での朝貢や城下での交易のみが本州系文化と接触する主要な窓口となってしまい，これ以降北海道と東北地方北部とはそれぞれ異なった道に歩みを踏みだすことになるのである。

こうした律令国家による対北方政策がいつ打ち出されたのかが大きな問題となろうが，筆者は現時点では，律令国家とエミシとの38年戦争の終結よりも前，むしろその開始期に先立つ8世紀後期のことではなかったかと憶測している。出羽柵の大規模な改修とそれにともなう秋田城への改称，桃生(ものう)城・雄勝(おがち)城・伊治(これはる)城の新造，そして多賀城の大規模な改修といった一連の諸事業は一般には単に城柵による領域的支配の北進をめざしたものと考えられているようであるが，果たしてそれのみに留まるのだろうか。多賀城改修の記念

碑である多賀城碑に3000里の彼方の靺鞨国界のことが刻まれ，秋田城下に北海道エミシらしい人影がみられることなどは，この時期が律令国家の北方遠隔地に対する新たな政策の始点であることを示唆しているように思われてならない。

同じく“本州との交流”とはいっても，北海道エミシにとって，東北地方北部のエミシ集団との間の地域相互の交流と日本律令国家という国家権力を介した交流とでは，その本質はまったく異なっていたのである。

注

1）樋口「渡島のエミシ」(鈴木靖民編『古代王権と交流1　古代蝦夷の世界と交流』名著出版，1996年)。
2）鈴木靖民「古代蝦夷の世界と交流」(同上書所収)。
3）熊谷公男「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館，1986年)，蓑島栄紀「阿倍比羅夫の北征と東北アジア世界」(佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館，1995年)。
4）大沼忠春「北海道の古代社会と文化――七～九世紀――」(註1前掲書所収)。
5）上野秀一「北海道続縄文文化の諸問題――北大式をめぐって――」(『第5回縄文文化検討会シンポジウム　北日本続縄文文化の実像――古代蝦夷の成立と展開に関する諸問題――』縄文文化検討会，1994年)。
6）石附喜三男『アイヌ文化の源流』(みやま書房，1986年)，菊池徹夫『北方考古学の研究』(六興出版，1984年)。
7）石田肇「形質人類学から見たオホーツク文化の人々」(『古代文化』48-5，1996年)。
8）菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会，1995年)。
9）鈴木前掲論文（註2）。
10）樋口前掲論文（註1）。
11）同上。
12）瀧川政次郎「斉明朝における東北計略――特に斉明紀に見える地名について――」(地方史研究所編『余市』余市郷土史研究会，1953年)，同「斉明朝における東北計略補考」(『史学雑誌』67-2，1958年)。
13）樋口前掲論文（註1）。
14)『国立歴史民俗博物館研究報告第64集　青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究』(国立歴史民俗博物館，1995年)。

15) 室賀信夫『古地図抄――日本の地図の歩み――』(東海大学出版会，1983年)。
16) 熊田亮介「蝦夷と蝦狄――古代の北方問題についての覚書――」(高橋富雄編『東北古代史の研究』註3前掲所収)。
17) 菊池俊彦「北東アジアからみた古代の余市」(『余市シンポジウムの記録――北東アジア海域の諸民族と交易――』北海道・東北史研究会，1995年)。
18) 鈴木前掲論文（註2）。
19) 古垣玲「蝦夷・俘囚と夷俘」(『川内古代史論集』4，1988年)。
20) 熊田前掲論文（註16)。
21)『扶桑略記』養老2年（718）8月乙亥（14日）条には，出羽・渡島両地方のエミシが朝廷に馬を献上した記事がみえる。史料的にはやや問題を含む記事であるが，8世紀前期において北海道エミシと東北地方北部日本海側のエミシとの間の交流が深かったことを示唆していよう。
22) 今泉隆雄「秋田城の初歩的考察」(虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』吉川弘文館，1995年)。
23) 熊田亮介「元慶の乱関係史料の再検討――『日本三代実録』を中心として――」(『新潟大学教育学部紀要』27-2，1986年)，同「『賊気已衰』――元慶の乱小考――」(『日本歴史』465，1987年)。
24) 三浦圭介「古代東北地方北部の生業にみる地域差」(日本考古学協会編『北日本の考古学』吉川弘文館，1994年)，同「安藤氏台頭以前の津軽・北海道」(国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社，1994年)。